

「社会的孤立」とは何か ①

若者たちの暮らしと「社会的孤立」

連載では、子どもの貧困や中間的就労、住まいの確保、社会的排除のリスクの大きい依存症の課題など、生活困窮者支援をめぐる国の整理を参考にしながら、地域支援の視点を探ってきました。これまで紹介した本県の取り組みから、経済的貧困にとどまらない問題や、家族や地域との関係の中で生み出される生活困窮の課題が見えてきています。そこで、連載後半では、生活困窮と密接にかかわる「社会的孤立」に注目し、若者や高齢者、障害のある方など対象者像ごとに、どのような孤立の現実があるのか、県内の福祉実践をもとに追っていきます。

第1回目の今回は、自立援助ホーム「湘南つばさの家」の前川礼彦ホーム長にお話を伺い、社会的養護から巣立つ若者支援の視点を出発点に、若者の「社会的孤立」について考えます。

若年層に広がる「社会的孤立」

社会構造の変容は、高齢者のみならずさまざまな世代に「社会的孤立」の問題を生み出しています。

20～30代の若年層の「社会的孤立」については、以前からニートやひきこもりといった課題が取り上げられているところですが、昨今の厳しい雇用情勢による就労機会の喪失は、若者の経済的な自立をさらに難しくし、地域社会の中に、居場所やつながりを持ちづらい状況に陥る若者を増やしています。

また、そうした社会の状況は、若者の背景にある親世代や家庭環境にあつても同じで、生活困難から生じる養育上のさまざまな問題が、若者たちの「生きづらさ」となって蓄積され、社会に出ていくときの困難の要因となっていることも少なくありません。

社会的自立を強いられる若者たち

今回、お話を伺った前川さんがホーム長を務める「自立援助ホーム」は、児童養護施設などを退所後に就労自立を目指す若者や、家庭で生活できず、中学卒業後または高校中退や高校卒業後に就労自立を目指す若者たちを支援する、児童福祉法上の事業です。

自立援助ホーム「湘南つばさの家」(茅ヶ崎市)は、平成18年12月に、賛同者・協力者の支援のもとで開設されました。定員6名のホームでは、15～20歳未満の青少年(男子)が、月額3万円の生活費を負担しながら、1～2年

程度を目安に入居し、それぞれ自立を目指します。

「家族や頼る人もいない寂しさと葛藤する若者や、社会の中で挫折を繰り返し、孤立し、自死を選んだ若者たちとの出会いがあった。10代後半の若者が社会とつながり、収入を得ていくことは並大抵のことではない」

200人を超える若者たちと出会い、生活を共にしてきた前川さんは振り返ります。

事例 私には、失敗は許されない

Aさんは、幼少期に親から虐待を受け、児童養護施設で育ちました。人と話すことが苦手な「高校で同級生と上手くやっていきたいけれど、どうしていいかわからない。話し掛けて迷惑がられたらどうしよう」周りの視線が何だか気になってしまふ」など、職員に打ち明けることも多々ありました。

高校卒業を控え、Aさんは就職面接を受けるものの、なかなか採用につながりません。児童相談所のケースワーカーや施設職員に相談し、自立援助ホームを利用しながら、改めて就職活動を進めていくことに決めました。そして入居から1年半、時間はかかりましたが、Aさんは就職先と新たな住まいを見つけたことができました。

自立援助ホームを退所し、一人暮らしのアパートへと生活の場を移したAさん。職場では黙々と仕事をこなし、勤務態度は極めて真面目です。それでも「臨時採用で入った職場だから」という気持ちもあってか、Aさんはな



20年にわたり、青年たちと生活を共にしてきた前川さん。自立援助ホームを退所した若者たちと、今もつながりを持ち続けています

◆ (福)白十字会林間学校
自立援助ホーム「湘南つばさの家」
☎/FAX 0467-58-6260
URL <http://www.shonan-tsubasa.com/>

かなか同僚の輪に入っていくことができず、どこか居心地の悪い思いがしていました。仕事が終わるとアパートにまつすぐ帰り、一人で夕食をすませるものの、次の日の仕事のことを考え始めると眠れません。

「私にはもう帰る場所はない。頼れる家族もない。だから失敗は許されない。ここで何とか生きていかなくては」

**行き場のない思いが
心の孤立を深めていく**

事例のAさんの暮らしは、前川さんにはどのように映ったのでしょうか。

「生まれて初めてのアパート暮らしへの不安感、一人きりで暮らす孤独感、10代から親元を頼れず、失敗したら後がないという切迫感。それは暗闇の断崖絶壁を歩かされているようなものかもしれません。」

自立援助ホームを巣立っていく若者たちを見てみると、虐待など心身共に深く傷ついた

経験や、家庭の事情から親と離ればなれで暮らさなくてはならなかった時間が、周囲からの疎外感や自己否定感を強め、彼らを生きづらくさせているように感じます。

社会的養護の場合、18歳を超えると児童相談所のかかわりが途絶え、福祉施設職員との関係も、退所後は次第に薄れていきます。簡単には癒えることのない苦しみを内に抱えながら、なかば社会へと放り出された若者たちは、一人で何とか社会にしがみつき、必死に生きていこうとしているのです。

18歳以降、青年期を迎えた彼らは公的支援の仕組みから大きく遠ざかります。若者たちが押しとどめていた思いが気づかなければ、彼らも出口のない思いから抜け出せません。私たちの仕事は、そんな彼らの心の孤独に気づき、『あなたのことを忘れていないよ』という根源的なメッセージを伝え続けること。社会との橋渡し役となり、彼らの目指す自立を支えることだと思っています。

これは、社会的養護に限らない、生きづらさを抱える若者への支援に共通する視点ではないでしょうか」

潜在化する若者たちの生活課題

若者を取り巻く社会情勢をみると、急速な人口減少、長引く厳しい雇用情勢などがあるにもかかわらず、依然として、就労による社会的自立が強く求められています。生き方の選択肢が広がり、個々の暮らしが多様化する一方で、公的支援の狭間に置かれている若者た

ちの生活課題は、とても見えづらくなっているのかもしれませんが。

「特に社会的養護のもとで育った若者たちは、自分に自信がなく、漠然と生きることへの不安感を抱えている場合があり、対人関係の保ちづらさからも孤立に陥りやすい。アパート等に住まいを移した彼らとの継続的なつながりや、訪問等による地域生活支援の仕組みがなければ、いつの間にか社会から孤立してしまう」と前川さん。そうした社会的養護を受けた若者たちへの支援さえ整っていない現状と、新たな公的支援の仕組みづくりの必要性を強く語ります。

そして、今回紹介したような支援につながっている若者以外にも、同様の生きづらさを抱えながら、人知れず地域に暮らす若者たちの存在、制度の狭間に置かれた若者たちの深刻な生活課題について警鐘を鳴らします。

「社会全体を変えていくことに時間が掛かったとしても、自分には帰る港があると思えるような、少しの勇氣と元気が湧きだすような心の拠り所を社会の中につくっていく必要がある。若者たちが新たな一歩踏み出すとしたとき、『大丈夫、見ているよ』と勇氣づけてくれる大人の姿を思い浮かべられるか。『元気でやっているか？最近どうだ？』と声を掛けてくれる人が周りにいるだろうか」

18歳以降の青年期を支える仕組みづくりと、若者を見守り・支える地域づくりに向けた課題が投げ掛けられています。

(企画調整・情報提供担当)